

「長距離ランナーは死の囁き」 (双子姉妹の事件簿〔2〕)

作者：志茂田景樹

徳間文庫(447円 (当時) , 1992年初版)

紹介者：榎本博康

[紹介]

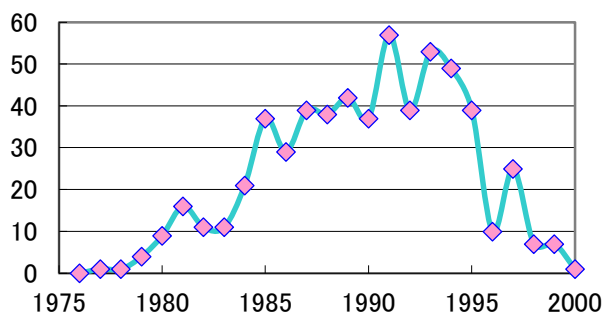
代々木の格式ある家に住む、姉の夏美は警視庁の刑事、妹の冬子は詐欺師。瓜ふたつの双子である。

テレビで恒例の伊豆女子マラソンを放映している。化粧品メーカーに所属する美貌の麻美れいと、三ヶ国混血の目白ローズのトップ争いだ。そして2時間37分11秒で麻美が接戦を制し、オリンピックのキップを手に入れる。

姉妹は桜吹雪の下、自宅の広大な庭に緋毛氈を敷いて重箱を並べての昼餼、そこに矢文が。化粧品メーカーに何か問題があることを示唆する文書が届く。



本の紹介は早々に切り上げよう。志茂田景樹さんは、本の内容よりも先に、作者自身に目が行ってしまうという、不思議な方だ。ヘアーマニキュアをしてご自分でデザインした派手な衣装を着たり、ヌード写真集を出したりといった行動の裏に、私は非常にまじめな生活者を感じてしまう。月3冊というペースで小説を書くには、健康な生活をつづけなければならないはずだ。朝



事務所に出勤して昼間執筆するという生活を続けていらっしゃるようだ。

志茂田景樹さんの出版数。合計583冊だ。(2000.1まで)

最近、書店の棚に見かけることが少なくなったような気がする。調べてみると、上図のように1995年までを境に執筆数が下がっている。累計は現在(2000年1月)までで683冊だ。この数値は単純検索なので、同じ内容を別の本として再出版したものがダブルカウントされていたり、対談集などの小説でないものも含まれているので、小説作品数としてはもう少し減るが、それにしてもすごい創作数である。でもこの執筆ペースの変化は、一般サラリーマンの人生とも似ている。35歳位から一人前の仕事ができ、45から55歳位まではガンガン結果を出して、後はむしろ後進の育成に回っている。最近はず寺子屋という名の塾を開いている。以下は志茂田先生のホームページの自己紹介だ。

1940年3月25日静岡県生まれ。76年「やっそこ探偵」で小説現代新人賞受賞。80年に「黄色い牙」で直木賞を受賞、84年に「汽笛一聲」で文芸大賞を受賞。90年「著作200冊記念パーティー」の衣装のデザイン・モデル・プロデュースまで自ら務める。93年に著作300冊達成し、間もなく400冊達成となる。96年に出版社KIBA BOOK創立。自らの精力的な作家活動と、新人作家の発掘・育成に励んでいる。ファン層は1歳～80歳まで。

大変な多作家だが、一般に流行作家の執筆数はどうなっているのだろうか。それをまとめてみたが……な、なんと次ページに示すように上には上が。斎藤栄の1,000冊以上とは、20年続いた週刊誌と同じ数だ。小説家以外では、例えばマンガの手塚治はさらに上の1,658冊である。すごい。

さて、マラソンの話にしよう。志茂田先生は余りマラソンを走るイメージは無いが、本書で西伊豆マラソンというのを「開発」なさった。ただ西伊豆ではどうコース取りをしても坂がきつく、最近の高速レースにはならない。季節も4月では暖かすぎる。しかしこの年（1992年）のバルセロナ・オリンピックは暑い8月に開催され、35キロからは約90メートルも上るモンジュイックの丘があることを考えると、極めて妥当な選考レースであると思える。小説では勝手にこういうレースを創作するのが面白い。ただ最初にレースがあるだけで、内容は全くマラソンに関係がないと言っていい。単にタレント性のある美人ランナーを出したかっただけのようだ。

それにしても、誠光堂に所属する美人ランナーとは、執筆当時は資生堂に所属していた谷川真理選手を名指ししているような設定だ。真理さんは1991年の東京国際女子で優勝し、バルセロナ・オリンピック出場は今一步の所だった。しかしオリンピックが全てではないし、むしろ今も走るタレントとして、現役で活躍している姿が嬉しい。もちろん私も大ファンである。数年前の内うちのリレーで、第一走者の私が余りに遅いので、彼女の健脚をしても挽回できないことがあった。誠に申し訳ないが、私の汗の染みたタスキを掛けて、遅れを取り戻すべくやや苦悶の表情を浮かべて一生懸命走った真理さんのことは、一生忘れません。

(初稿2000. 3. 10)

[リバイバル感想]

いやはや、この初稿を読んだらタイムカプセルを開けたような気持になった。当時はフル百回楽総会と共に、谷川真理ファンクラブにも入っていた。公園や大学構内などで練習会が開かれていた。ファンランという名称ながら、そのメンバーは皆さん速かった。また練習会ではその日の仕上げにリレーをしたが、皆さんは勝つ気持ちで走る。一方私は元々遅いし、追い込んだ練習をする気もないし、その中では年齢も高めの方だったし、勝つ気も無いので、実は迷惑な存在だったかもしれない。上記のリレーとは別の時のリレーでは、一周が1kmのコースだった。皆さん速いので、思わずつられて3分台で走ったが、これでは体に悪いと2週目からは4分くらいにスピードを落とし

No	作家名	冊数
1	斎藤栄	1,093
2	森村誠一	937
3	赤川次郎	847
4	笹沢左保	768
5	松本清張	705
6	司馬遼太郎	680
7	西村寿行	636
8	西村京太郎	614
9	志茂田景樹	583
10	清水一行	572
11	勝目梓	568
12	井上靖	555
13	和久峻三	547
14	池波正太郎	544
15	吉川英治	527
16	五木寛之	518
17	陳舜臣	499
18	大藪春彦	479
19	遠藤周作	477
20	田辺聖子	435
21	栗本薫	377
22	平岩弓枝	368
23	内田康夫	363
24	童門冬二	361
25	渡辺淳一	351
26	山村美紗	340
27	山田風太郎	334
28	半村良	330
29	曾野綾子	327
30	柴田錬三郎	320
31	筒井康隆	305
32	峰隆一郎	304
33	田中光一	300

単純検索であり、実作品数はこれより少なくなります。不勉強で抜けている作家もあると思います。参考として見てください。

たことを思い出した。4分でも私には高速である。運動部経験が無いので、どうしても体に悪そうな追い込んだ走りをする気持ちになれない。文化の違いを味わった。

とかするうちに、私は転勤になってファンクラブとは疎遠になってしまった。

ところが2016年になって、思いもよらない案内をいただいた。ファンクラブの設立20周年記念の同窓会を開くという。皇居の近くのホテルに約20名が集まった。谷川真理さんには拙著「走り読み文学探訪」を贈呈することができ、また私の手元の1冊の見返しに写真に示すサインをいただくことができた。

そうだ、私の手元にもうひとつ、真理さんのサイン入りのものとしてバンダナがある。日付は1996年だから、ファンクラブが発足した頃だ。そして1997年からファンクラブの会報向けに「ランニング文学探訪」として22篇を投稿したのが、このシリーズが生まれたきっかけであった。何とも言えぬ感謝の気持ちが湧いてくる。

谷川真理さんは普通のOLから24歳で本格的に走り始め、市民ランナーとの位置づけでありながら、

オリンピック出場一步手前まで到達した。その後地雷を無くす運動や、市民ランナーの育成、大会の運営などの谷川真理としての独自のビジネスモデルを打ち立て、企業所属アスリートから市民ランナー育成やランニングイベント等を運営する経営者になった。美人ランナーと呼ばれることに留まらず、自分自身をブランディングし、市民ランナー目線を活かした活動には目を見張るばかりである。とても尊敬しています。

(2021. 3. 20)

